

時間的展望の先行要因としての統制感

杉山 成

個人の時間的展望に影響を及ぼす要因には、社会経済地位に関する要因をはじめとしてさまざまなものがとりあげられているが、杉山(1995)は、そうした時間的展望に影響を与える包括的な要因として自己認知の要因を想定した。そして時間次元における諸自己像と時間的態度との関連性を検討し、未来の自己に対する期待、すなわち現在の自分と理想の自分の間に隔たりを埋めることができるという期待や、自己の成長に対しての期待が個人的未来に対するポジティブな態度と関わりを持つことを示している。

この期待(expectancy)という人間の認知機能は古くから行動の重要な規定因としてみなされており、動機づけ予測モデル(期待理論; expectancy theory)として理論化がなされてきた。特に、個人が持つ成果の獲得に関する期待は、統制感(perceived control)と呼ばれ、Rotter(1966)やSeligman(1975)、Bandura(1982)などのそれぞれの理論において議論されている。これらの理論では、自分の行おうとする行為やその結果に自分自身が影響を及ぼしうるかという統制可能性の信念、すなわち期待が行動を制御していることが強調されている。

そこで本論文では、この自己認知として統制感を未来展望の先行要因として考慮し、両者の関連性を検討する。

研究1 統制感の低下が未来展望に及ぼす影響の実験的検討

研究1では、習得性無気力(Learned Helplessness)の諸研究で使用される実験室実験の手続きに基づいてこの統制感を実験的に操作し、それが未来展望に及ぼす影響を検討する。未来に対する展望が、現在個人が抱いている統制感と関連を持つのであれば、実験的な操作による統制感の低下に伴い、

未来展望は操作前に比してネガティブな方向に変化するものと推測される。

方 法

被験者 大学生 14 名。実験群，統制群の 2 群にランダムに分けられた。

実験手続き 事前に Locus of Control (以下, LOC) の尺度 (水口, 1984 の MLCS 尺度) を 5 件法によって実施している被験者を実験室に入室させ, TAT 図版 6 枚への反応を求めた。3 枚目の図版への反応が終了した時点で, 実験群には統制不可能課題を挿入し, その後残りの 3 枚の図版への反応を求めた。ただし, 統制不可能課題は全く別の課題だと被験者に教示した。そのため TAT 図版に対する反応の測定と統制不可能課題は, 異なる実験者がそれぞれの個別の実験だとして実施した。他方, 統制群には統制不可能課題は行わず, 3 枚の図版の終了後に 5 分の間隔をおき, 後半の図版を提示した。6 枚目の図版が終了した後に MLCS 尺度を再度実施した。最後に被験者にディブリーフィングを行い, 実験の操作に気がついたかどうかを確認し, 実験目的の説明を行った。実験の全体的な流れは FIGURE. 1 のようになる。

(1) **TAT 図版の呈示** TAT 図版は Teahan (1958) が使用したものと同じ 6 枚を使用し, 前半に No. 1, No. 2, No. 14, 後半に No. 10, No. 15, No. 13 B をランダムに提示した。なお, 前半の 3 枚, 後半の 3 枚は決めておいて, その中だけでランダムに提示したため, ある個人に前半で使われた図版が別の個人には後半に使われるようなことはない。

(2) **統制不可能課題** 統制感を低下させるための統制不可能課題は次の 3 つである。①クレペリン式の間算課題; 1 回につき 30 秒の間算作業を 10 回するように求めるが, 実際には 20 秒から 25 秒ほどにして, 下位 10% の水準とする検査用紙上の波線を越えさせないように操作した。連続 4 回波線を越えさせずに作業を中止させて, 実験者は右下の注意書きを指摘し, 遂行成績が極めて悪い場合は当事者のためにも作業を中止すべきことがうたわれている旨を気遣いながら述べた。②「ハノイの塔」形式の課題; 実際には回答不可能なものを与えた。3 分後に, 標準的な人が回答しうる規定の時間をかなり

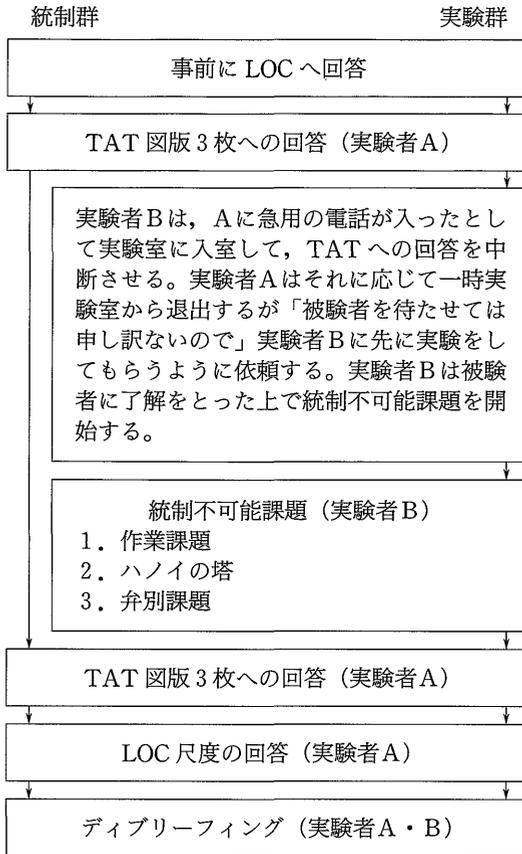


FIGURE. 1 実験の手続き

過ぎたと伝え、課題を終了させた。③弁別課題；図版に含まれる 10 要素のうち、実験者側が正解と決めた要素を推定するという課題である。8 対の図版の提示の間にはどちらに正解の要素が入っているかを指さすように求めた。正解の要素が入っている側を指さした場合には「正解」、入っていない場合は「不正解」と実験者が答えるので、それを手がかりに要素を当てるように指示を与えた。しかし、実際には実験者は全くランダムに反応し、8 対の図版提示の後の要素の回答に関しても不正解と反応した。4 回それを続けた後に、

実験者は、被験者がかなり成績の悪い方に属しておりデータとして片寄ってしまうので実験はここで打ち切ると伝えた。

結果と考察

ディブリーフィングの際に確認したところ、実験群において実験者の交代や統制不可能課題について疑いを持った被験者はいなかった。それですべての実験参加者を分析対象とした。

まず、統制感低下の実験的操作の確認として、あらかじめ測定した LOC 得点と、実験の最後に測定した LOC 得点を比較した。その結果、LOC 尺度のとりうる範囲は、30—150 点であるが、実験群の得点は実験前の平均 86.0 から実験後には平均 91.7 へと上昇しており、統制群においては平均 89.7 から平均 85.8 へ減少していた。MLCS 尺度においては得点が高いほど外的統制 (external control) 傾向、すなわち一般的統制感の減少傾向を示すので、数値でみる限りにおいては、実験群において一般的統制感が統制不可能課題により一時的に低下させられたことが認められる。ただし、Wilcoxon のサインランク検定²⁾を行った結果では、この減少は統計的に有意なものではなかった³⁾。

1) 近年、被験者に心理的苦痛を与える可能性のある実験の倫理性が議論されており、たとえば、アメリカ心理学会 (American Psychological Association) は、1982 年にこうした立場から倫理原則を示している。本実験の実施においては、統制不可能事態の経験という実験操作の危険性を十分に考慮した上で、被験者に心理的な後遺症が残らないように細心の注意を払った。具体的には、実験後、被験者に実験の目的とデザインを十分説明し、実験内の統制不可能が実験操作によるものであって本人の内的な要因とは全く関係のないことを彼らが十分に理解するまで念入りのディブリーフィングを行った。

2) 本研究では、実験群 7 名、統制群 7 名という被験者の人数を考え、ノンパラメトリック検定の一つであるサインランク検定を用いた。

3) この原因としては MLCS 尺度の性質が挙げられる。MLCS 尺度は一般的信念としての主観的統制感を測定する尺度であり、比較的長期の間隔においても安定した個人的特質を反映することが求められ、それに基づいて標準化されている。それ故、状況的な心性というよりも比較的安定した特性的な心性に焦点を当てるものであったのであろう。

そして、TAT 反応に基づく未来展望の評価については、TAT 反応のプロトコルに対してリカート形式の 5 件法による評価を行った。評価は心理学専攻の大学院生 2 名に研究の目的を知らせないで依頼した。評価の際には被験者の実験群、統制群という所属を隠してランダムに配置し、バイアスのかからないように配慮した。前半 3 枚、後半 3 枚の評価の合計点を評定者別に算出し、相関を求めたところ、前半で $r = .85$ 、後半で $r = .82$ と高かったため、両評定者の合計を各 TAT 図版の未来評価得点とした。前半・後半の未来評価得点は、高いほどポジティブな態度を示し、それぞれ 6 点から 30 点までの値をとりうる。

その結果、実験群 7 名および統制群 7 名における前半 3 枚、後半 3 枚のそれぞれの未来評価得点は TABLE. 1 および TABLE. 2 のようになった。前半と後半の未来評価得点の差は実験群、統制群別にサインランク検定によって検定した。その結果、統制群においては表にみられるように前半と後半の間の未来評価得点の変化は有意なものではなかったが、一方、実験群においては、前半に比して後半で未来評価得点が有意に ($p < .05$) 減少する傾向が認められた。

本研究における仮説は「統制不可能事態を経験した個人の未来展望は、統制不可能経験以前のそれに比してネガティブに変化するであろう」というも

TABLE. 1 実験群における前半・後半の未来評価得点

被験者	前半	後半	di	順位
A	21	8	13	5.5
B	16	10	6	3.5
C	17	18	-1	1
D	19	17	2	2
E	16	16	0	
F	24	11	13	5.5
G	18	12	6	3.5

T=1 よって 5%水準で有意

TABLE. 2 統制群における前半・後半の未来評価得点

被験者	前半	後半	di	順位
H	16	19	-3	5
I	19	17	2	2.5
J	23	19	4	6
K	19	21	-2	2.5
L	18	23	-5	7
M	18	20	-2	2.5
N	19	21	-2	2.5

T=8.5 よって有意ではない

のであった。その結果、統制群においては前半と後半の未来評価得点に有意な差がなかったのに対して、統制不可能事態を経験した実験群においては、前半に比して後半の未来評価得点が有意に減少するという結果が得られた。これは前述の仮説を支持する結果といえる。

研究 2 一般的統制感と時間的態度の関連の調査的検討

研究 2 では、統制感と時間的展望の関連性を個人差としての一般的統制感の観点から検討する。一般的統制感は未来における成果獲得の期待が般化された信念であり、また過去の経験によって構成されるものと考えられているので、一般的統制感と時間的展望との間には密接な関係があると推測される。

先行研究においては、一般的統制感の高い内的統制型 (internal control) の個人と、その低い外的統制型 (external control) の個人との間の時間的展望の様相の相違がいくつか報告されている。たとえば、Thayer, Gorman, Wessman, Schmeidler, & Mannucci (1975) は、大学生を被験者に時間的経験質問紙 (TEQ; Wessman, 1973) を実施し、内的統制・外的統制別に時間的展望を検討している。TEQ は時間的展望についての 4 因子、すなわち目前の時間に対する切迫感・焦り、長期にわたる個人的な方針、時間の利用性、時間に対する態度の個人的一貫性を問うものであるが、結果的に 4 つすべての因子において LOC 尺度との有意な相関がみられ、外的統制的な人は内的統制的な人に比して時間の連続性の認知に劣り、計画性に欠ける時間的展望を持っていた。さらに時間の利用という側面に関しても外的統制の被験者は非能率的であり、一貫性や安定性にも欠ける傾向を示した。Platt & Eisenman (1968) にも同様に、外的統制のものは内的統制のものよりも、未来展望の長さ (extension)、密度 (density) などの面においてよりネガティブな傾向がみられるとしている。また、Lessing (1968) は、5, 8, 11 学年生の自己責任性 (self-responsibility) と未来展望の長さとの関連性を検討し、彼らの自己責任性得点が未来展望の長さに対応を持ちながら、学年が上がるにつれて上昇していくことを見いだしている。このことは、自分が行動を統制

しうるという認知が未来展望の発達において基礎的役割を担っている可能性を示唆するものと考察される。

このように、先行研究においては、未来展望の長さ (extension) などの未来展望の構造的な側面に関しては、一般的統制感とのポジティブな関連性が先行研究によって確認されている。青年期は、時間的展望に関して深刻な変化の時期であり、現実と非現実の水準が斬次分化しはじめ、自分自身の理想目標や価値と、他方の期待の現実構造が考慮されなくてはならない現実という両方に一致するような形で、時間的展望を構造化することが要請される時期 (日高・吉田, 1980) といえる。こうした青年期において、一般的統制感を基礎として時間的展望の各側面が構成されていくのであれば、Lessing (1968) の指摘するような時間的展望の長さのみではなく、時間的志向性や時間的態度といった時間的展望の他の側面においても、一般的統制感の高群と低群の間に違いがみられることが予想される。

そこで本研究では、一般的統制感の個人差と時間的展望の側面、特にこれまで統制感との関連が検討されていない時間的態度との関連性を検討する。

調査 1

未来に対する態度は、個人の未来に対する感情的・情緒的な一般的な見解 (Nuttin & Lens, 1985) と定義される。この変数は、未来における種々の領域に対する態度との関連性が高く (Van Calster, 1979)、未来に対する態度が信念のように一般化されたものと考えられている。そして、この変数は主に個人特性に属するものとしてとらえられ、年齢、性、社会階層といった他の個人変数、成功・失敗経験、抑うつや自殺企図といった心理病理との関連性が検討されてきた。

本節ではセマンティック・ディファレンシャル (Semantic Differential) 形式の質問項目によって、個人が未来に対して持つ態度を測定する測度を開発し、一般的統制感との関連を検討する。これまで見てきた先行研究から考慮すると、一般的統制感の高い内的統制型は、一般的統制感の低い外的統制

型に比して、未来に対してポジティブな態度を持つであろうと推測される。

方 法

被験者 大学生 148 名（男性 52 人，女性 94 人，不明 2 名）。

質問紙 未来に対する態度についての質問に関しては，SD 法で構成された Lens (1985) の TAS (Time Attitude Scale) の未来版，および都筑 (1993) の尺度において使用された形容詞対リストから選出した。また，白井 (1987) が自由記述法によって，未来に対する態度は「希望」と「不安」という 2 軸によってとらえられるとしていることから，それらを表現すると考えられる形容詞を寺崎・岸本・古賀 (1992) による感情記述語のリストから採用した。そのようにして構成された 24 項目を未来に対する態度の質問項目とした。ただし，未来に対する態度が多次元で構成されている可能性を考慮して，両極性の尺度ではなく，単極性のリカート形式の尺度とした。そして「以下の形容詞は，あなたの未来にどのくらいあてはまりますか」という教示を与え，5 件法で評定を求めた。

一般的統制感尺度には，水口 (1984) の MLCS 尺度を用いた。これらは 7 件法で回答させた。また，未来に対する態度の測度の妥当性の検討のために，林 (1988) による BDI (Beck Depression Index) の日本版尺度を用いた。これは 4 件法による 16 項目の尺度である。

手続き 心理学の講義時間内に質問紙を配布し，回答させた。

結果と考察

LOC 尺度に関して得点が高いほど内的統制傾向が高くなるように得点化したところ，全 30 項目による α 係数は $\alpha = .81$ であった。とりうる得点の範囲は 30—210 点であるが，合計得点の平均は 105.21 (標準偏差，11.23) であり，男女の間には有意な差はなかった ($t = 0.56$, $df = 146$, $n.s.$)。この LOC 合計得点の分布は正規分布に近かったので，合計得点に基づいて被験者を 2 分し，低得点の被験者群を外的統制群 (LOC 得点が 103 点未満の 69 名)，高

得点の被験者群を内的統制群（LOC 得点が 103 点以上の 75 名）とする。

未来に対する態度項目の主成分分析を行い、第 1 因子に寄与の低い 19, 23 項目を識別力の無い項目として除外した。また、主成分分析のベクトルの方向に基づき、22 項目の方向をそろえ、合計得点を算出した。この合計得点に関して男女差はなかった ($t=0.04$, $df=137$, *n.s.*)。

Beck (1976) は、認知の 3 要素として、自己・世界・未来に対する認知をあげ、これらの認知の歪みによって抑うつが生じるとしている。また、Pyszczynski, Holt, & Greenberg (1987) は、自己と他者に感情価を持った出来事が生起する確率を予測させ、抑うつ傾向の強い人は未来をより悲観的に見ることを示している。そのため、未来に対する認知は、抑うつの傾向と関連を持つ（林, 1994）と推測される。本研究において、妥当性を検討するために用いた BDI 日本版の α 係数は $\alpha = .85$ であった。そこで、未来に対する態度の合計得点との相関を求めたところ、 $r = -.61$ ($p < .01$) という有意な負の関連性が確認された。本研究において、BDI との間に有意な関連が確認されたことは、今回作成した測度の妥当性を首肯するものといえる。

そこで、未来に対する態度の合計得点と LOC 得点との相関係数を求めたところ、男性において $r = .43$ 、女性で $r = .34$ で、全体では $r = .37$ であった。LOC 尺度は内的統制傾向が強いほど得点が高くなるように配点したので、この相関関係は、内的統制傾向と未来に対してポジティブな態度との正の関連性を示すものである。

そして、未来に対する態度を構成する 22 項目それぞれについて内的・外的統制群における平均値の検定を行った (TABLE. 3 参照)。その結果、両群間に有意差が確認されたのは、「悪い」「小さい」「受動的な」「不安定な」という 4 項目と「活気のある」「自信のある」「楽しい」「魅力のある」「変化に富んだ」「はっきりした」「可能性のある」「希望のある」「見通しの明るい」という 9 項目であった。前の 4 項目に関しては、外的統制群の方が有意に得点が高く、後の 9 項目に関しては内的統制群の方が有意に得点が高かった。こうした結果からは、内的統制群が外的統制群に比して、自身の未来に対して

ポジティブな態度を持つことが確認される。

調査2

白井(1994)は時間次元に対する自由記述の回答を元に時間的展望体験尺度(Experiential time perspective scale)を構成、標準化し、因子構造を検討した結果、「過去の受容」「現在の充実感」「目標志向性」「希望」という4因子を確認した。この尺度で測定しているものは、一般的な時間的展望研究の分類(Nuttin & Lens, 1985)でいえば、時間的態度の測度に相当する。

TABLE. 3 内的統制群と外的統制群における未来に対する態度

	内的統制群(N=69)	外的統制群(N=78)	t
1 重要な	4.45 (1.15)	4.07 (1.26)	1.86 ₊
2 冷たい -	3.94 (1.32)	3.78 (1.12)	0.74
3 暗い -	4.02 (1.25)	3.75 (1.20)	1.36
4 空虚 -	4.02 (1.26)	3.66 (1.25)	1.71 ₊
5 遠い -	3.43 (1.30)	3.10 (1.22)	1.57
6 悪い -	4.19 (1.22)	3.73 (1.24)	2.20*
7 小さい -	4.16 (1.35)	3.67 (1.27)	2.23*
8 不幸な -	4.23 (1.25)	3.90 (1.15)	1.63
9 活気のある	4.20 (1.12)	3.56 (1.01)	3.59***
10 受動的な -	3.58 (1.21)	3.15 (1.08)	2.25*
11 不安定な -	3.23 (1.40)	2.96 (1.16)	1.28
12 自信のある	3.39 (.91)	2.86 (1.10)	3.11**
13 楽しい	4.08 (1.11)	3.71 (1.05)	2.09*
14 魅力のある	4.14 (1.14)	3.75 (1.08)	2.13*
15 苦しい -	3.17 (1.34)	3.18 (1.08)	0.04
16 変化に富んだ	3.75 (.96)	3.31 (1.20)	2.37*
17 開かれた	3.91 (1.03)	3.36 (1.03)	3.15**
18 はっきりした	3.27 (1.20)	2.73 (.90)	3.08**
20 可能性のある	4.17 (1.05)	3.57 (.98)	3.53***
21 不安な -	2.97 (1.34)	2.63 (1.22)	1.58
22 希望のある	4.16 (1.10)	3.69 (1.05)	2.58*
24 見通しの明るい	3.79 (1.07)	3.21 (1.06)	3.28***
未来に対する態度	84.04 (18.51)	75.41 (15.47)	3.02**

注) -は逆転項目 ***p<.001 **p<.01 *p<.05 +p<.10

調査2ではこの時間的展望体験尺度を用いることによって、個人的過去・個人的現在・個人的未来に対する態度と一般的統制感の関連を再検討する。

方 法

被験者 大学生 168 名 (男性 81 名, 女性 87 名)。

質問紙 以下の尺度に対する評定は、すべて 6 件法で行った。LOC に関しては鎌原・樋口・清水 (1982) による 18 項目から構成される尺度を使用し、時間的展望の尺度には白井 (1994) の時間的展望体験尺度を使用した。

手続き 心理学の講義時間内に質問紙を配布し、回答させた。

結果と考察

LOC 尺度に関して得点が高いほど内的統制傾向が高くなるように得点化したところ、全 18 項目による α 係数は $\alpha = .75$ であった。合計得点のとりうる範囲は、30—108 点であるが、全体の平均は 70.28 (標準偏差, 10.71) であり、男女の間には有意な差はなかった ($t=1.41$, $df=166$, n.s.)。この LOC 合計得点の分布は正規分布に近かったので、合計得点に基づいて被験者を 2 分し、低得点の被験者群を外的統制群 (LOC 得点が 71 点未満の 85 名)、高得点の被験者群を内的統制群 (LOC 得点が 71 点以上の 83 名) とする。

一方、時間的展望体験尺度に関しては、各下位尺度の尺度得点に素点の合計得点を項目数で除したものをあてることとして、各下位得点における α 係数を算出したところ、「現在の充実感」で $\alpha = .76$ 、「目標志向性」で $\alpha = .66$ 、そして「希望」で $\alpha = .67$ であり、項目の数の少なさを考慮すれば、これらは最低限の内的整合性は持つと考えられる。ところが、「過去受容」では $\alpha = .45$ と極端に低かった。直交バリマックス回転、斜交オブリミン回転による因子分析⁴⁾を行った結果では、「現在の充実感」「目標志向性」「希望」の 3 因子はほぼ白井 (1994) と同じくまとまったが、過去受容に属する 4 項目が因子としてまとめられず、上の 3 因子に分散して位置していた。このように本研究における時間的展望体験尺度の因子分析では白井 (1994) と同一の因子は得ら

れなかった。ただし、3 因子はほぼ同様のものが得られたこと、および今回の被験者の数の少なさという要因を考慮して、以下の分析では、白井の下位分類を用いることとする。よって、各下位尺度のとりうる得点範囲は、現在の充実感と目標志向性の尺度で5—30点、希望と過去の受容の尺度は4—24点となる。

時間的展望体験尺度の下位尺度について内的統制群・外的統制群間における平均値の検定を行った。その結果、TABLE. 4 のように時間的体験尺度の4つの下位尺度の得点において内的統制・外的統制群間に有意な差が確認された。過去尺度である過去の受容、現在尺度である現在の充実感、そして未来尺度である目標志向性と希望において、内的統制群は有意にポジティブな傾向を示していた（過去の受容 $t=2.65$ $p<.01$ ；現在の充実感 $t=4.45$ $p<.001$ ；目標志向性 $t=5.03$ $p<.001$ ；希望 $t=5.68$ $p<.001$ ）。未来に対する態度を測定する2つの尺度は、目標志向性尺度が「私には、将来の目標がある」という項目に代表されるように未来の生活設計・人生計画に対する認知的側面を測定しているのに対し、希望尺度は「私の将来には希望が持て

TABLE. 4 内的・外的統制群における時間的展望経験尺度得点の平均

	Locus of Control の 2 群		t
	外的統制群 (n=85)	内的統制群 (n=83)	
過去の受容	3.61 (0.86)	3.95 (0.82)	2.65**
目標志向性	3.31 (0.84)	3.98 (0.90)	5.03***
希望	4.24 (0.89)	4.96 (0.73)	5.68***
現在の充実感	3.55 (0.98)	4.20 (0.89)	4.45***

注) *** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$, () 内は標準偏差。

4) 白井 (1994) の尺度構成時においては直交バリマックス回転による因子分析が用いられており、本研究でも最初はバリマックス回転による因子分析を施した。しかし、本文内に記したように、白井と異なる因子構造が得られたので、因子間の相関を想定した斜交オプティム回転も施した。しかし、両回転による因子構造にはほとんど差異がなく、各因子を構成する項目に若干の違いがみられたのみであった。

る」というような、未来へのより感情的側面を測定する尺度である。未来に対する態度を構成するこの2つの異なった側面の両方において、内的統制群は外的統制群に比してポジティブな傾向を示していた。

先述のように、Platt & Eisenman(1968)や Thayer, Gorman, Wessman, Schmeidler & Mannucci (1975) は、外的統制の個人が内的統制の個人に比して、未来展望の長さ、密度、連続性や計画性という未来展望の各側面において、よりネガティブな傾向を示すことを確認している。本研究の結果もまたこれらの先行研究と一致するものであり、一般的統制感の個人差と未来展望の各側面の様相との密接な関連を示唆するものと考えられるであろう。

全体的考察

本論文では時間的展望の先行要因として「統制感」という自己に纏わる心理的要因を想定し、それらの関連性に関する検討を行った。

その結果、実験操作によって統制感を低下させられた被験者の未来展望は、そうした操作を受けなかった被験者に比して、よりネガティブに変化することが見いだされた。また、パーソナリティとしての一般的統制感の高い個人が低い個人に比して、より未来志向的であり、未来に対するポジティブな態度を持つということが確認され、両者の密接な関連が示唆された。

こうした結果は、自己に対する期待や統制感が、時間的展望の形成過程において、先行要因として重要な意味を持つことを示唆するものであるといえるであろう。特に青年期においては、職業や人間像などの人生目標を建て、その実現のための未来展望を構造化していくことが重要な発達課題となるが、こうした青年達にとって自分の活動や努力が成果に結びつくという統制感や現状の自身の能力やその成長に対する期待は、この手段—目標の構造化を支える基礎的な役割を持つものと推測される。

今後の課題としては、こうした先行要因としての統制感と時間的展望の他の側面との関連をさらに幅広く検討していく必要がある。例えば、本研究で

は未来展望における長さ、密度などの構造的成分、また未来展望の具体的内容（将来計画や目標）は扱ってはいない。こうした変数を対象とした研究が欧米において既にいくつか行われていることがその理由であるが、未来展望の各側面と自己認知の側面の関連性を比較するためには本邦でのデータを新たに収集することも必要であろう。

引用文献

- Bandura, A. 1982 Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*, **37**, 122-147.
- 林潔 1988 学生の抑うつ傾向の検討 カウンセリング研究, 20, 162-169.
- 林潔 1994 Depression 水準の測定および Depression と時間的展望との関連の検討 白梅学園短期大学紀要, **31**, 153-161.
- 日高三喜夫・吉田昭久 1980 Time Perspective 研究の概観 茨城大学 教心・異教・職指学科 教育心理と近接領域, **5**, 83-94.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 302-307.
- Lens, W. 1985 Attitudes towards the personal past, present, and future. In J. Nuttin & W. Lens (Eds.) *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven University Press/LEA.
- Lessing, E.E. 1968 Demographic, developmental, and personality correlates of length of future time perspective (FTP). *Journal of Personality*, **38**, 183-201.
- 水口禮治 1984 人格構造の認知心理学的研究——Locus of Control（統制の所在性）に関する疎一密仮説の提唱と検証—— 風間書房。
- Nuttin, J., & Lens, W. 1985 *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven University Press/LEA.
- Platt, J.J., & Eisenman, R. 1968 Intenal-external control of reinforce-

- ment, time perspective, adjustment, and anxiety. *Journal of Genetic Psychology*, **79**, 121-128.
- Rotter, J.B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**.
- Seligman, M.E.P. 1975 *Helplessness: On depression, development, and death*. San Francisco: Freeman.
- 白井利明 1987 現代青年の時間的展望の構造(1)——大学生と専門学校生を対象に——大阪教育大学紀要(第IV部門), **38**, 21-28.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, **65**, 54-60.
- 杉山成 1995 時間次元における諸自己像の関連からみた時間的展望 心理学研究, **66**, 283-288.
- Teahan, J.E. 1958 Future time perspective, optimism, and academic achievement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **57**, 379-380.
- Thayer, S., Gorman, B.S., Wessman, A.E., Schmeidler, G., & Mannucci, E. G. 1975 The relationship between locus of control and temporal experience. *Journal of Genetic Psychology*, **126**, 275-279.
- 都筑学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40-48.
- Van Calster, K. 1979 The affective time attitude towards the personal past, present, and future. In Nuttin, J., & Lens, W. (Eds.) *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven University Press/LEA.
- Van Calster, K.V., Lens, W., & Nuttin, J. 1987 Affective attitude toward the personal future: Impact on motivation in high school boys. *American Journal of Psychology*, **100**, 1-13.
- Wessman, A.E. 1973 Personality and the subjective experience of time. *Journal of Personal Assessment*, **37**, 103-114.